

対人苦手意識に影響を及ぼす2つの要因 - 対人苦手意識の原因帰属と人づきあいにおける苦手意識 -

日向野 智 子*¹

要 旨： 本研究では、特定の他者に対する対人苦手意識に影響を及ぼす要因として、対人苦手意識の発生原因に対する認知である「対人苦手意識の原因帰属」と、日ごろの「人づきあいにおける苦手意識」とを取り上げ検討を行った。研究1では、対人苦手意識の原因帰属によって、対人苦手意識における自己否定・他者否定の感情が異なるか検討した。多くの回答者が、同級生やクラスメイトなど、身近な存在に対して対人苦手意識を感じており、その原因は両者にあると認識されていた。また、対人苦手意識における自己否定の傾向は、対人苦手意識が自分または両者の相互作用の結果として生じていると考える女性ほど高いことが明らかになった。このような傾向は男性にはみられず、対人苦手意識における自己否定と対人苦手意識の原因帰属との関連について、性差が確認された。これに対して、対人苦手意識における他者否定の傾向には性差はなく、相手のせいに対人苦手意識が生じていると感じるほど、他者否定の傾向が高まることが見出された。研究2では、日ごろの人づきあいが対人苦手意識に及ぼす影響について検討を行った。主たる結果として、人づきあいにおける懸念の高さが対人苦手意識の自己否定を高めることが明らかになり、人づきあいにおける苦手意識と対人苦手意識との関連が明らかになった。

キーワード：対人苦手意識、原因帰属、人づきあいにおける苦手意識

多くの人が円滑な対人関係を望みながら、それは容易に達成されることではない。特定の人を避けたい、またはある人の前ではぎこちなくなるなど、特定の他者を苦手だと思ふことは、誰もが日常的に経験している対人的な問題の一つといえる。このような特定他者に対する苦手意識は、対人苦手意識として概念化されている（日向野・堀毛・小口, 1998）。対人苦手意識とは、特定の他者に対する消極的な態度をともなった否定的な感情のことを指す。また、対人苦手意識は、他者に対する率直な不快感情を特徴とする「わずらわしさ」と、苦手な他者との関わり方や、相手からの評価を気にかける「懸念」によって説明される（日向野・小口, 2002）。さらに、対人苦手意識においては、苦手な相手に対するネガティブ感情と、苦手意識を感じる自分自身に対するネガティブ感情とが生起することも明らかになっ

* 1 立正大学心理学部

ている(日向野他, 1998)。

本稿では、対人苦手意識に影響を及ぼす要因として、対人苦手意識を感じるの誰のせいなのかという対人苦手意識の原因帰属(研究1)と、特定の他者ではなく日ごろの人づきあいそのものに対する苦手意識(研究2)とをとりあげる。研究1および研究2において、それぞれの要因が特定の他者に対する対人苦手意識にどのような影響を及ぼすのか検討することを目的とする。

研究1

対人苦手意識が生じる原因としては、相手の自己中心性やいいかげんさ(日向野他, 1998)、外見や趣味・趣向等の極端な個性(日向野他, 1998)、コンプレックス(氏原, 1996)、ウマ(関根, 1996)や相性(曾我部, 1993)の問題、会話や性格の不一致(日向野他, 1998)等、さまざまな原因が挙げられている。日向野(2008)は、これらの原因を内的要因、外的要因、相互作用要因の3つの要因に整理している。内的要因とは、苦手な相手には何の非もなく、対人苦手意識を感じる本人が相手にコンプレックスを感じたり、社会的スキルが乏しかったりすることによって対人苦手意識が生起する場合である。すなわち、自己要因といえる。また、外的要因とは、相手の社会性の欠如によって迷惑を被られたり、理解しがたい言動や行動がみられるような相手であったり、相手の非によって対人苦手意識が生じる場合である。これは他者要因といえる。さらに、相互作用要因とは、ウマが合わない、会話が噛み合わない、相手が何を考えているのかわからない等、どちらか一方に非があるわけではないが、両者がうまく関わりあえない結果として対人苦手意識が芽生えてしまう場合である。

なぜ対人苦手意識を感じるようになったのかという原因についての認知はさまざまである。しかし、その原因をどのように認知しているのかということは、苦手な他者に対する感情や対人苦手意識をもっている自分自身に対する評価について、影響を及ぼすことが予測される。すなわち、対人苦手意識が生じる理由について、相手のせいだと思っているならば、相手を否定する気持ちが強く、自分自身を否定する傾向は低いであろう。逆に、自分のせいで相手に対人苦手意識を感じてしまうと思っている人は、相手を否定する気持ちは弱く、自分自身を否定する傾向が高くなると考えられる。しかしながら、どちらが悪いわけでもなく、自分と相手の両者が対人苦手意識の原因になっていると考えている人については、他者否定と自己否定の傾向がどのように表れるか、明確な予測はしがたい。

そこで、対人苦手意識が生じる原因を自己、他者、相互作用のいずれに求めるのかという認知を対人苦手意識の原因帰属とする。本研究では、対人苦手意識の原因帰属によって、個人の他者および自己に対する感情に予測したような差異がみられるのか検討することを目的とする。

方 法

1. 調査の実施 2008年7月初旬、都内私立大学において、集団回答による質問紙調査を実施した。調査対象者は、一般学生(以下より学生と表記)と社会人学生であった。
2. 有効回答者の内訳 有効回答者数は242名であった。分析対象者数は、学生は、男性82名($M = 19.18$, $SD = 1.09$)、女性138名($M = 19.04$, $SD = .99$)、社会人学生は、男性6名($M = 33.83$, $SD = 6.24$)、女性16名($M = 37.88$, $SD = 9.19$)であった(括弧内の M は平均年齢, SD は標準偏差)。
3. 苦手な同性の友人に関する質問項目 教示において、もっとも苦手な同性の友人を1人思い浮か

べてもらった。そこで、その友人との関係（同級生やバイト先の人など）と、苦手だと思う相手の特徴（態度や性格など）について、自由記述回答を求めた。次に、相手に苦手意識を感じる原因として、自分自身、相手、自分と相手の両者のうち、いずれの要因が大きいと思うか、選択してもらった（苦手の原因帰属）。最後に、対人苦手意識における感情尺度（日向野他，1998）の修正版を呈示した。同尺度について、「よく当てはまる（5点）」から中点として「どちらともいえない（3点）」、「まったく当てはまらない（1点）」までの5件法で評定させた。同尺度は、苦手な相手や相手との関わりに対するネガティブ感情である「他者否定」と、対人苦手意識を感じる自分自身に対してネガティブ感情を覚える「自己否定」から成る。なお、質問項目の相手の特徴は、本稿における分析から除外した。

結 果

1. 対人苦手意識における原因帰属 対人苦手意識が生じる原因は誰のせいだと思うのか、対人苦手意識の原因帰属について男女ごとにクロス集計を行った（Table 1）。男女ともに、対人苦手意識が生じる原因は、自分と相手の双方にあるとみなす対象者が多かった。

また、苦手な相手（同性の人）と自分自身との関係について、自由記述による回答を集計し、カテゴリー化を試みた。もっとも多かったカテゴリーは、「同級生やクラスメイト」であり、回答者全体234名中の76%である178名の回答があった。ほかには、「友だち」、「ゼミ・サークル・部活等のメンバー」、「バイト先の人」、「職場の人」などがあげられた。なお、「その他」のカテゴリーには、友人の友人や、近所の人、一度会っただけの人など、回答数が少なくカテゴリー化の難しい関係が含まれている。

この互いの関係性に関するカテゴリー分類に基づいて、対人苦手意識における原因帰属の傾向が異なるのかクロス集計を試みた（Table 2）。「同級生・クラスメイト」、「友だち」、「バイト先の人」、「職場の人」が苦手な人は、対人苦手意識が生じる原因は両者にあるという回答が最も多かった。これに対して、「ゼミ・サークル・部活等のメンバー」が苦手な人は、対人苦手意識が生じる原因は相手であるという回答と、両者であるという回答が、ともに50%であった。

Table 1 性別ごとにみた原因帰属のクロス集計表

| | | 対人苦手意識の原因帰属 | | | |
|-----|-----|-------------|------|-------|-------|
| | | 自 分 | 相 手 | 両 者 | 計 |
| 性 別 | 男 性 | 23.0 | 23.0 | 39.0 | 85.0 |
| | 女 性 | 27.1 | 27.1 | 45.9 | 100.0 |
| | 計 | 25.0 | 39.0 | 86.0 | 150.0 |
| | | 16.7 | 26.0 | 57.3 | 100.0 |
| | 計 | 48.0 | 62.0 | 125.0 | 235.0 |

注1) 上段は観測度数、下段は性別における原因帰属の構成比(%)を表す

Table 2 相手との関係性ごとにみた原因帰属のクロス集計表

| | | 対人苦手意識の原因帰属 | | | | |
|-----------|------------------|-------------|------|------|-------|-------|
| | | 無回答 | 自分 | 相手 | 両者 | 計 |
| 自分と相手との関係 | 同級生・クラスメイト | 3.0 | 35.0 | 40.0 | 100.0 | 178.0 |
| | | 1.7 | 19.7 | 22.5 | 56.2 | 100.0 |
| | 友 だ ち | 1.0 | 1.0 | 3.0 | 5.0 | 10.0 |
| | | 10.0 | 10.0 | 30.0 | 50.0 | 100.0 |
| | ゼミ・サークル・部活等のメンバー | 0.0 | 0.0 | 3.0 | 3.0 | 6.0 |
| | | 0.0 | 0.0 | 50.0 | 50.0 | 100.0 |
| | バイト先の人 | 0.0 | 2.0 | 3.0 | 4.0 | 9.0 |
| | | 0.0 | 22.2 | 33.3 | 44.4 | 100.0 |
| | 職 場 の 人 | 0.0 | 3.0 | 4.0 | 13.0 | 20.0 |
| | | 0.0 | 15.0 | 20.0 | 65.0 | 100.0 |
| | そ の 他 | 0.0 | 3.0 | 5.0 | 3.0 | 11.0 |
| | | 0.0 | 27.3 | 45.5 | 27.3 | 100.0 |
| | 計 | 4.0 | 44.0 | 58.0 | 128.0 | 234.0 |
| | | 1.7 | 18.8 | 24.8 | 54.7 | 100.0 |

注1) 上段は観測度数、下段は各関係性における原因帰属の構成比 (%) を表す

2. 因子分析と信頼性係数 対人苦手意識の感情尺度について、主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を施した。さらに、得られた下位尺度の信頼性を検討するために、Cronbachの係数を求めた。全15項目中14項目が、2つの因子にまとまった (Table 3)。第一因子は、自分のことをどう思われているのだろうかとあれこれ考えてしまう、相手のことや、相手との関係を考えてみると、自分に自信をなくしてしまう、といった項目を含む「自己否定」($r = .84$)であった。第二因子は、その人との関わりにストレスを感じる、相手のことなど考えたくもないなどの「他者否定」($r = .82$)であった。

3. 性差・属性・苦手の原因帰属による対人苦手意識の差異 対人苦手意識の感情尺度における自己否定と他者否定の各尺度得点について、性別、属性 (学生・社会人学生)、苦手の原因帰属 (自分・相手・両者) を要因とする3要因の分散分析を行った。

1) 自己否定尺度得点 自己否定尺度については、性別と苦手の原因帰属について、有意な交互作用効果が得られた ($F_{(2,220)} = 3.19, p < .05$) (Figure 1)。単純主効果の検定を行ったところ、女性について苦手の原因帰属の単純主効果が有意であり ($F_{(2,151)} = 14.40, p < .001$)、対人苦手意識の原因を自分 ($N = 25$)、または、自分と相手の両者にあると考えている人 ($N = 86$) は、相手に原因があると考えている人 ($N = 39$) よりも自己否定の得点が高かった。性別の単準主効果は、対人苦手意識の原因帰属が自分である場合 ($F_{(1,46)} = 6.37, p < .05$) と、自分と相手の両者にある場合 ($F_{(1,126)} = 7.55, p < .01$) において、有意であった。いずれについても、女性は男性 (自分 $N = 22$; 両者 $N = 39$) よりも自己否定の得点が高く示された。

Table 3 対人苦手意識尺度の因子分析結果および信頼性係数

| 項目番号・項目 | M | SD | 因子負荷量 | | |
|-------------------------------------|------|------|-------|-------|-----|
| | | | 第1因子 | 第2因子 | 共通性 |
| 第1因子 自己否定 (= .84) | | | | | |
| 3. 相手のことや、相手との関係を考えると、自分に自信をなくしてしまう | 2.51 | 1.29 | .80 | -.06 | .58 |
| 15. 自分のことをどう思われているのだろうか、あれこれ考えてしまう | 2.77 | 1.50 | .76 | .07 | .65 |
| 8. 緊張したり、落ち着かなくなったりしてしまう | 2.52 | 1.23 | .72 | .11 | .53 |
| 7. 相手のことや相手との関係を考えると、さびしい気持ちになる | 2.28 | 1.14 | .71 | -.02 | .51 |
| 14. 相手にコンプレックスを感じたり、うらやましくなったりする | 2.26 | 1.32 | .68 | -.17 | .49 |
| 6. どういうふうに接しようかと考えてしまう | 3.61 | 1.26 | .64 | .07 | .41 |
| 13. イライラしたり、動揺したりする自分がいやになる | 3.37 | 1.31 | .64 | .36 | .54 |
| 9. 相手の特徴が自分のなかの一面のように感じる | 2.10 | 1.12 | .55 | -.07 | .30 |
| 第2因子 他者否定 (= .82) | | | | | |
| 12. その人との関わりにストレスを感じる | 3.85 | 1.13 | .09 | .81 | .67 |
| 2. 相手のことなど考えたくもない | 3.56 | 1.21 | -.19 | .79 | .65 |
| 5. なるべく一緒にいたくないと思う | 4.09 | .99 | -.16 | .78 | .64 |
| 1. イライラする | 3.65 | 1.15 | -.16 | .78 | .64 |
| 4. ゆううつで、つまらない気分になる | 3.29 | 1.26 | .27 | .70 | .57 |
| 10. どうしてなんだろうと、相手に文句を言いたくなる | 3.23 | 1.36 | .22 | .55 | .35 |
| 説明分散 | | | 4.03 | 3.49 | |
| 累積寄与率 (%) | | | 28.76 | 53.66 | |

注：項目11「自分とはあわないから仕方がないと思う」は、共通性が低かったため不良項目として分析から除外した。

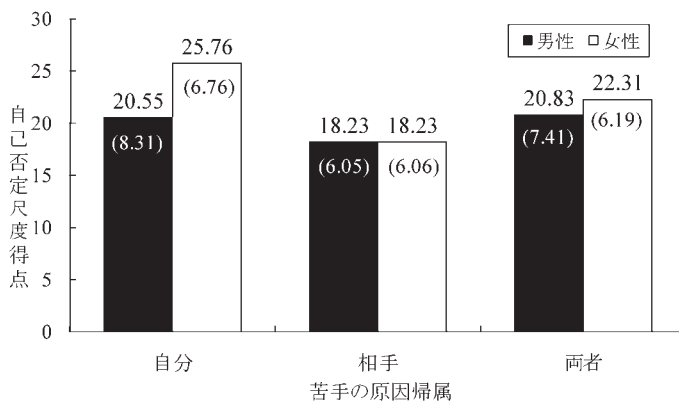


Figure 1 苦手の原因帰属と属性による自己否定尺度得点

注：図中の値は平均尺度得点を、括弧内の値は標準偏差を表す。

2) 他者否定尺度得点 他者否定尺度については、苦手の原因帰属のみ、有意な主効果が得られた ($F_{(2,223)} = 3.89, p < .05$)。多重比較の結果、相手に原因があると思っている人 ($N = 62$) の他者否定得点は、自分に原因があると思っている人 ($N = 48$) と自分と相手の両者に原因があると思っ

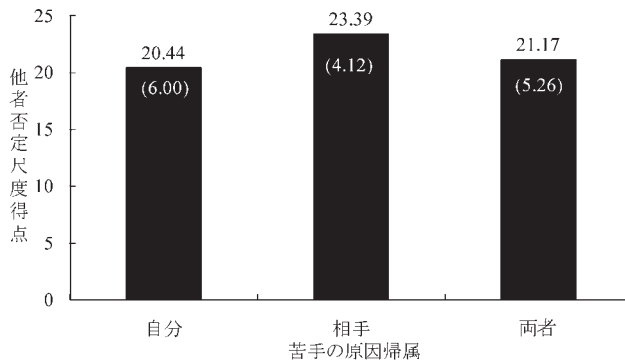


Figure 2 苦手の原因帰属による他者否定尺度得点

注：図中の値は平均尺度得点を、括弧内の値は標準偏差を表す。

ている人 ($N=124$) に比べて高かった (Figure 2)。

考 察

対人苦手意識を誰に感じているのか回答してもらった結果、「クラスメイト・同級生」に対して対人苦手意識をもっている回答者が全体の八割弱であり、「友だち」のカテゴリーも含めると、八割を超えることが明らかになった。このような傾向から、対人苦手意識は、日頃から関りをもちやすい身近な人に対してもたれやすいといえるであろう。また、対人苦手意識を向ける対象として、「ゼミ・サークル・部活等のメンバー」、「バイト先の人」、「職場の人」なども挙げられた。これらは、集団内における役割や上下関係などがクラスメイトや同級生よりも明確になりやすい関係である。これらの関係性に対する対人苦手意識は、3つのカテゴリーを合わせても全体の14%でしかなかった。「クラスメイト・同級生」は、「ゼミ・サークル・部活等のメンバー」、「バイト先の人」に比べて比較的長い時間を同じ空間で過ごす他者である。したがって、対人苦手意識は物理的な近接性と時間の共有性が高い身近な他者に対して生じやすいといえるであろう。

また、相手との関係性と対人苦手意識の原因帰属との関連を調べたところ、「クラスメイト・同級生」については、両者の相互作用の結果、対人苦手意識が生じているという回答が半数以上であったが、自分が原因、相手が原因という認識は、二割前後であった。これと同様の傾向が「職場の人」についてもみられている。このような関係においては、どちらか一方に対人苦手意識の原因を求めるよりは、どちらも悪いわけではない、あるいは、どちらにも問題点があるというように、互いの関係性の中で、なんらかの問題点や不一致があると認識されやすいと考えられる。

次に、対人苦手意識の原因帰属が、対人苦手意識における自己また他者感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行った結果、対人苦手意識における自己否定については、対人苦手意識の原因を誰に求めるのかと、性別によって、自己否定の程度に差のみられることが明らかになった。すなわち、対人苦手意識が生じている原因を自分または両者の相互作用の結果であると認識している女性は、同男性に比べて自己否定の傾向が強いことが示された。また、対人苦手意識の原因を自分または両者に求めている女性は、原因を相手に求めている女性に比べて自己否定の傾向が高かつ

た。自己否定は、自分に自信をなくしてしまったり、苦手意識を感じる自分自身をネガティブにみなしたりする傾向が高い。また、対人苦手意識の原因が自分のみではなく両者にあると考えているとしても、女性は自己否定の傾向が高かった。このような結果からも、女性は対人苦手意識のような望ましくない対人関係の影響を受けやすく、自分自身をネガティブに見なしやすい傾向がうかがえる。なお、男性よりも女性において対人苦手意識が負担になりやすいという傾向は、職場における対人苦手意識についても同様の結果がみられている（日向野・小口，2002）。一方、男性については、対人苦手意識の原因を自分、相手、両者のいずれに求めるとしても、自己否定の程度に差は見られなかった。このような結果から、男性については、対人苦手意識の原因帰属と自己否定とは関連せず、相手との関係性によって自己評価は影響を受けないと考えられる。男女におけるこのような性差を生み出す要因を探ることが、今後の課題になるであろう。

対人苦手意識における他者否定の傾向については、性差は見られず、原因帰属の影響のみがみられた。すなわち、相手のせいで対人苦手意識が生じていると考えているのであれば、そうでない場合よりも苦手な相手を否定する傾向が高いという結果であった。対人苦手意識における他者否定の傾向については、相手が悪いと思っていれば、相手を非難し、関わりを避けようとする傾向が高まるというごく自然な結果であるが、このような傾向については、男女差はないという点が特徴であろう。

研究2

苦手意識を覚える対象は多様であるが、対人関係上で生じる苦手意識は、特定の他者に対する対人苦手意識の他にも存在する。たとえば、人づきあいそのものに対する苦手意識である。対人苦手意識においては、苦手意識が向けられる対象は特定の個人であり、グループの人間関係や人づきあいそのものに対する苦手意識は対象にはならない（日向野他，1998）。人づきあいにおける苦手意識と対人苦手意識との関連については、日ごろの人づきあいは良好であったり、特に問題もなかったりする人が対人苦手意識を覚えることもあれば、人づきあいそのものが苦手な人が特定の他者に対して対人苦手意識も覚えることもあるということが指摘されている（日向野他，1998；日向野，2008）。したがって、特定他者に対する対人苦手意識と日ごろの人づきあいとの間に明確な対応関係はなく、両者は独立するものとして考えられてきた。

人づきあいにおける苦手意識と対人苦手意識との関連を検討する場合、対人苦手意識における対他者感情と対自己感情という対人感情の方向性を考慮するべきであろう。ここで、対人苦手意識における感情の二側面について整理してみる。対人苦手意識においては、相手に対するネガティブ感情として他者否定やわずらわしさを、苦手意識を感じる自分自身に対するネガティブ感情として自己否定や懸念を感じる事が明らかになっている（日向野他，1998；日向野・小口，2002）。他者否定やわずらわしさの傾向は、相手との関わりや相手の存在を否定的にみなし、自己ではなく苦手な相手に不快感情を向けるという特徴をもつ。これに対して、自己否定や懸念に付随する不快感情は、他者ではなく自己に向けられやすい。対人苦手意識における自己否定の傾向は、相手との関係性の中で自己評価を低下させやすく、懸念の傾向は、苦手な他者に対してどのようにふるまえばよいのか、相手からどのように思われているのかということについての関心が高い。また、対人苦手意識における相手からの評価に対する懸念の傾

向は、対人不安 (e.g., Buss,1980; Schlenker & Leary,1982; 菅原, 1992) やその一形態であるシャイネス (e.g., Buss,1980; Leary & Schlenker, 1981; Zimbardo, 1977) の生じる前提となる、他者からの注目や評価に対する敏感さとも共通している。そのため、対人苦手意識において、自己否定や懸念の傾向が強い人については、苦手な相手だけではなく、日ごろの人づきあいそのものに対しても懸念を感じやすい人もいであろう。一方、わずらわしさや他者否定の傾向は、苦手な相手のみに向けられたネガティブ感情である。そのため、苦手な対象者ではなく他者一般に対するわずらわしさは、感じやすい人もいれば、感じにくい人もいるはずである。このように考えてみると、対人苦手意識における自己否定や懸念については、日ごろの人づきあいの影響を受けやすいが、対人苦手意識における他者否定やわずらわしさについては、日ごろの人づきあいから受ける影響は低いと考えられる。

そこで、本研究では、人づきあいにおける苦手意識が対人苦手意識に及ぼす影響は、自己否定の傾向と他者否定の傾向においては異なることを予測し検討を行う。本研究では、(1) 人づきあいにおける懸念の高さは、対人苦手意識における自己否定の傾向を高める、(2) 人づきあいにおけるわずらわしさの高さは、対人苦手意識における他者否定とは関連しない、という2つの仮説を立て、検討していく。

方 法

1. 日ごろの人づきあいについての質問項目 小口・山口・永房・日向野・八城・安藤 (2005) が使用した他者一般に対する苦手意識を測定する尺度10項目 (以下では、人づきあい尺度とする) に回答してもらった。本尺度は、職業場面における特定の他者に対する対人苦手意識を測定する職場用対人苦手意識尺度 (日向野・小口, 2002) をもとに、人づきあいそのものに対する苦手意識を測定するよう改作されたものである。そのため、職場用対人苦手意識と同様に、日ごろの人づきあいに対する苦手意識を、わずらわしさと懸念の二側面から測定する。人づきあい尺度について、「よく当てはまる (5点)」から、中点として「どちらともいえない (3点)」、「まったく当てはまらない (1点)」までの5件法で回答してもらった。
2. 苦手な同性の友人に関する質問項目 研究2では、対人苦手意識における感情尺度 (日向野他, 1998) のみ分析に使用した。同尺度については、研究1で自己否定と他者否定の2因子解が得られている。

なお、研究1と研究2において調査票を共有しているため、調査の実施および有効回答者の内訳については、研究1と同様であった。

結 果

1. 因子分析と信頼性係数 人づきあい尺度について、主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を施した。さらに、得られた下位尺度の信頼性を検討するために、Cronbachの係数を求めた。因子分析の結果をTable 4に示す。分析の結果、人と接するのはうっとうしいと思う、できることなら人とは関わりたくないと思う、などの項目を含む「わずらわしさ」($r = .89$)と、人に何か指摘しなければならないときは、あたりさわりのないように指摘する、人にははっきりとものがいえない、などが含まれる「懸念」($r = .73$)の2因子解が得られた。

Table 4 人づきあい尺度の因子分析結果および信頼性係数

| 項目番号・項目 | M | SD | 因子負荷量 | | |
|---------------------------------------|------|------|-------|-------|-----|
| | | | 第1因子 | 第2因子 | 共通性 |
| 第1因子 わずらわしさ (= .89) | | | | | |
| 1. 人と接するのはうっとうしいと思う | 2.60 | 1.15 | .87 | .04 | .76 |
| 2. できることなら人とは関わりたくないと思う | 2.26 | 1.11 | .87 | -.00 | .75 |
| 4. 人と接するとつまらない気分になる | 2.08 | 1.06 | .84 | .15 | .72 |
| 5. 人との関わりにストレスを感じる | 2.60 | 1.17 | .82 | .15 | .70 |
| 3. 人と接するとイライラする | 2.11 | 1.06 | .80 | .07 | .65 |
| 6. 人と関わるのは楽しい | 1.98 | .77 | .64 | -.10 | .42 |
| 第2因子 懸念 (= .73) | | | | | |
| 10. 人に何か指摘しなければならぬときは、あたりさわりのないよう指摘する | 3.74 | 1.01 | -.12 | .76 | .59 |
| 9. 人にははっきりとものが言えない | 3.43 | 1.26 | .04 | .76 | .58 |
| 8. 人に悪い印象を与えないよう表面上は穏便に接する | 3.86 | .94 | .21 | .73 | .57 |
| 7. 他人が自分のことをどう思っているだろうかとあれこれ悩む | 3.72 | 1.17 | .05 | .74 | .56 |
| 説明分散 | | | 3.99 | 2.29 | |
| 累積寄与率 (%) | | | 39.93 | 62.85 | |

注：逆転項目である項目6は、平均値の算出および因子分析の際には、得点を逆転して用いた。

2. 人づきあいに対する苦手意識が対人苦手意識に及ぼす影響 日ごろの人づきあいに対する苦手意識は、特定の他者に対する対人苦手意識に影響を及ぼすのかを検討するために、対人苦手意識の他者否定と自己否定の各尺度得点を目的変数、人づきあいにおけるわずらわしさと懸念の各尺度得点を予測変数とする回帰分析を行った。この分析の前に、人づきあい尺度におけるわずらわしさと懸念の各尺度得点について、性別と属性（学生または社会人学生）を要因とする2要因の分散分析を行った。その結果、わずらわしさについては有意な主効果、交互作用はみられなかった。しかし、懸念については、属性の主効果が有意であり ($F_{(1,238)} = 13.51, p < .001$)、日ごろの人づきあいに対する懸念は、学生 ($M = 15.02, SD = 3.17, N = 220$) のほうが社会人学生 ($M = 12.00, SD = 3.25, N = 22$) よりも有意に高かった。また、前述したとおり、対人苦手意識の感情尺度における自己否定尺度の得点については性差があることが確認されている。そのため、重回帰分析においては、学生と社会人それぞれについて、男女ごとに分析を行った。

Table 5 - 1 と Table 5 - 2 に重回帰分析の結果を示す。対人苦手意識における自己否定については、学生の男性について、日ごろの人づきあいに対するわずらわしさおよび懸念が、有意な予測変数として選出された (Table 5 - 1)。また、学生の女性については、人づきあいにおける懸念のみ、対人苦手意識における自己否定の予測変数として有意であった (Table 5 - 1)。これらの結果から、学生の男性については、対人関係そのものに対する苦手意識が高いと、対人苦手意識における自己否定の傾向を強めることが明らかになった。一方、学生の女性については、対人苦手意識における自己否定について、人づきあいにおけるわずらわしさの影響はみられず、懸念の影響が強いということが見出された。対人苦手意識における他者否定については、社会人女性の人づきあいに対する懸念のみ、有意な予測変数として選出された (Table 5 - 2)。すなわち、人づきあい

Table 5 - 1 苦手な人に対する自己否定を目的変数とした重回帰分析

| 予測変数 | 学 生 | | 社会人学生 | |
|-------------------|-------|--------|-------|------|
| | 男 性 | 女 性 | 男 性 | 女 性 |
| 人づきあいに対する「わずらわしさ」 | .25* | .06 | -.16 | .08 |
| 人づきあいに対する「懸念」 | .26* | .43*** | .72 | .51† |
| R^2 | .16** | .19*** | .36 | .30 |

注 1 : † $p < .10$ * $p < .05$, *** $p < .001$

注 2 : 表中の値は、標準偏回帰係数 () を表す

Table 5 - 2 苦手な人に対する他者否定を目的変数とした重回帰分析

| 予測変数 | 学 生 | | 社会人学生 | |
|-------------------|-----|------|-------|------|
| | 男 性 | 女 性 | 男 性 | 女 性 |
| 人づきあいに対する「わずらわしさ」 | .15 | .14† | .17 | -.07 |
| 人づきあいに対する「懸念」 | .08 | .10 | .41 | .63* |
| R^2 | .03 | .03 | .31 | .36† |

注 1 : † $p < .10$ * $p < .05$

注 2 : 表中の値は、標準偏回帰係数 () を表す

に対する懸念が強いと、対人苦手意識において他者否定の傾向が強くなることが示された。

考 察

人づきあいにおける苦手意識が対人苦手意識に及ぼす影響は、対人苦手意識における自己否定と他者否定においては異なるという観点から検討を行った。予測した通り、人づきあいにおける懸念が高ければ、対人苦手意識における自己否定も高くなる傾向がみられた。このような結果は仮説 1 を支持するものである。他者との関係や他者から受ける評価に敏感である人は、苦手な人との関わりにおいてはより一層そのような傾向が高じやすく、自己を否定的にみなしやすといえるであろう。したがって、対人苦手意識によって生じる自己否定については、日頃の人づきあいの影響を受けやすいといえるであろう。

しかし、学生の男性において、日頃の人づきあいに対するわずらわしさの高さも、特定の他者に対する対人苦手意識における自己否定を促進することが明らかになった。このような関連が成立するためには、学生の男性が、他者と良好な関係を築くことが望ましいと考えているという前提が求められる。人づきあい自体がわずらわしく、うまくいかないのであれば、苦手な人との関係はなおさらうまくいかないであろう。そのため、望ましい自己像との乖離が大きくなりやすい苦手な人との関わりにおいて、学生の男性は落ち込んだり、自信をなくしたりという自己否定が生じるのであろう。

一方、対人苦手意識における他者否定と人づきあいにおける苦手意識との関連については、一定の関連が得られないことを予測していた。仮説 2 の通り、人づきあいにおけるわずらわしさと、対人苦手意識における他者否定の傾向は関連しなかったが、社会人女性においては、人づきあいにおける懸念が高いほど、対人苦手意識における他者否定も高いことが示された。他者から否定的な評価を受けたくない、相手との関係に問題が生じないよう注意を払うという傾向は、日頃の人づきあいにおいては他者との関係をよりよくし、良好な関係の維持に努めるために高じるとも考えられる。このような傾向は、自分に

対して良心的に接してくれたり、重要な関係性をもっていたりする他者に向けられやすいであろう。そのため、他者に対して気を配りやすい人ほど、自分にとって好ましくない態度をもっている苦手な人に対しては、「他者に対する配慮に欠ける」というような否定的な評価をするのではないであろうか。このような理由から、日頃の人づきあいにおける懸念が苦手な人に対する他者否定の傾向につながるといえるであろう。しかしながら、社会人女性のみこのような傾向が得られた理由については、本研究の結果のみでは説明が難しいため、今後明解にすることが課題である。

引用文献

- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: W. H. Freeman and Company.
- Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1981 Shyness and Sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330 - 339.
- 日向野智子 2007 苦手な友人に対する社会的スキルと対人苦手意識との関連 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクショナル・リサーチ・センター研究年報, 4, 95 - 98.
- 日向野智子 2008 ひとを苦手になる 加藤司・谷口弘一(編) 対人関係のダークサイド 北大路書房
- 日向野智子・堀毛一也・小口孝司 1998 青年期の対人関係における苦手意識 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1, 43 - 62.
- 日向野智子・小口孝司 2002 対人苦手意識の実態と生起過程 心理学研究, 73, 157 - 165.
- Leary, M. R. & Schlenker, B. R. 1981 The social psychology of shyness: A self-presentational model. In J. T. Tedeschi (Ed.), *Impression management theory and social psychological research*. New York: Academic Press.
- 小口孝司・山口一美・永房典之・日向野智子・八城薫・安藤清志 2005 職業場面における自己変容：大学窓口サービスの場合 III職員からみた大学窓口サービス 船津守 自我・自己の変容と社会的感情 平成14年～16年度科学研究費研究成果報告書, 42 - 54.
- Schlenker, B. R. & Leary, M. R. 1982 Social anxiety and self-presentation: A conceptualization model. *Psychological Bulletin*, 92, 641 - 669.
- 関根正明 1996 子どもにとってにがてな先生とは 児童心理, 50, 81 - 85.
- 曾我部和広 1993 相性のいい子, 相性の悪い子 児童心理, 47, 107 - 115.
- 菅原健介 1992 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, 7, 19 - 28.
- 氏原 寛 1996 にがて意識の心理 児童心理, 50, 1 - 10.
- ジンバルドー P. G. 木村 駿・小川和彦(訳) 1982 シャイネス I 内気な人々, II 内気を克服するために 頸草書房 (Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness: What it is, What to do about it*. Massachusetts: Addison-Wesley.)

注1：本研究は、平成19年度心理学研究所研究助成を受けて行われたものである。

注2：本研究の一部は、日本パーソナリティ心学会第17回大会（於：お茶の水女子大学）にて発表した。